
雪うさぎは氷空を駆け巡り

テラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪つさぎは氷空を駆け巡り

【Nコード】

N1482Y

【作者名】

テラ

【あらすじ】

舞台はお決まり魔法や魔法生物の世界「アルヘイラ」。

主人公の「59」は記憶を無くし、雪原のなかひっそりと建てられた建物に監禁されていた、不思議な力を持つ、でもひ弱で優しい少女。彼女は自分の過去を手に入れるため、猛吹雪の中建物を飛び出すが...

プロローグ（前書き）

silver break のイリアス君の影響で機械音痴はパソコンをいじってみました。ガキンチョの駄作ですが小さじ一杯分のヒマと広い心のある人は見てみてください。

プロローグ

冬の寒さが訪れた森に、真っ白で軽いものがふわふわと降りてきた。

「・・・雪だ。」

私と、あの子の大好きな天気。後で、みんなをここに呼んで遊ぼうかな。早く、積もるといいな。雪が積もるまでは私はここで歌でも歌っていようか。私とみんなの大好きだったあの歌を・・・。

悲しいときは空を見てご覧 空に白い華が咲いたのがわかるでしょ？

触ったら溶けてしまったけど消えた訳じゃない まだそこに在るの

「だから悲しまないで 私もたとえ見えなくなっても消えたわけじゃない 私は・・・」

一陣の強い風が、歌声をのせてはるか遠くの地まで走り去って行った。

逃げ出したモルモット

「はあ．．．はあ．．．」

肩で荒く息をしながら石づくりの壁にもたれかかる。もう、だいぶ遠くまで来たけど、まだ追ってきているかもしれない。もっと、遠くまで．．．

「いましたか!？」

「．．．っ!？」

私は嫌と言う程聞きなれたその声の主から自分の姿を隠そうと、必死で細い壁の隙間に体を押し込んだ。

まさか、もうこんなところまで追って来ていたなんて!

(お願い、こないで．．．)

「神」というものを信じた事は無かったけれど、必死に手をあわせて「何か」に祈った。今捕まれば、またあの忌まわしき場所に連れ戻されてしまう。それだけは、避けたかった。

「早く捕まえないと実験が．．．!」

「待て。」

(この声は．．．!)

忘れもしない、いや、忘れられるはずもないこの声。みんなを、次々と消していった男の、感情を感じさせない冷たい声。何もされていないのに、ただ声を聞いただけで身動きが取れなくなってしまつような、そんな声に自然に体がカタカタと震えてくる。

「アレの性質を、直接の管理者のお前が知らない訳がなかるう。この空では、吹雪が来る。こっちが死ぬ前に、早くもどるぞ。」

「しかし．．．!」

「二度も言わせる気が。」

「．．．っ!．．．はい。」

ざく、ざく、ざく．．．

雪を踏む、重たい音が遠ざかったのを確認して、私は隙間から這い

出て、雪の上へあたりこんだ。

少女が、ふと目に入った雪の塊を片手に取り、顔の高さまで引き上げると、それは宙に浮き、クルクルとまわってから粉々に砕け散った。それは、自然に起きた現象ではなく、少女がその手で、意図的に行なったことだった。それを行なった少女の顔は笑っているのに、悲しげでもある。少女は、どんな寒さであつても、凍死することはない。そして、氷や水を自由に操れる。それが、彼女の力であり、そして彼女を絶望に陥れるものでもあつた。

「私って．．．何なんだろう．．．。」
ひとり呟いて、少女は少しよるめきながら立ち上がった。その時には、先程まで悲しげに歪んでいた彼女の綺麗なライトブルーの目は、決意に満ちていた。

「もう、いかなくちや。」

その言葉を、弱気になっている自分に向かって強く、強く言い放ち、少女は激しく吹き荒れる吹雪の中に飛び出していった。

私が何者なのか。その答えはまだ見つからない。
ない。

私自身の手で、これからそれを見つけていかなければ．．．。

逃げ出したモルモット（後書き）

見ていって下さってくださってありがとうございます、感謝感激雨霰です。

??? (前書き)

まだうまく文の整理出来てないんですけど、気にしないで下さいね。

???

少女が姿を消した後。彼女の逃げ出した建物の一室で、数人の人間による話し合いが行われていた。

「何故“59”を捕まえずにおめおめと戻ってきた!? アレは、唯一の成功品だぞ!」

最高級のワインを美しい絨毯にぶちまけ、近くにあった高価な壺を割つてもなお騒ぎ続ける太った男に、赤い髪の方は一瞬だけ軽蔑の眼差しを向けた。

(これしきの事で取り乱すなど、自らの愚かさを証明している様なものだ。愚か者は愚か者らしく、そこで赤子の様に騒ぎ立てて入れば良い。)

そんなことを思われているとは微塵も考えもせずにもまた怒鳴り散らす男にうんざりしながらも、それでも下の者としての礼儀とやらをやっているように見せてやる。

「申し訳ございません。吹雪に見舞われてしまい、奴の姿が紛れてしまったのです。しかし...」

その声は、ただ聴くだけで震えてしまうような、静かで恐ろしい、しかし美しいもので、少女を何よりも怯えさせたあの声だった。声の主がにたありと笑うと、彼の顔は墮落した天使の顔に見える。

その様子が磨きあげられた鏡に映し出され、赤い髪が炎で揺らめく様には、太った男も思わず黙ってしまう様な恐ろしさがあった。

「アレは、何としても“回収”して参ります。」

言い切るその声は、確信に満ち溢れていたのが、そこに居た人間にはすぐ見てとれた。

「そこまで言い切る自信は、どこから来ているのでしょうかね、アカツキ?」

半分呆れた様に問う女の声に、彼は笑って答えた。

「私は、今までに与えられた任務は全て遂行した。そして、それはこれからも変わらない。その事は、お前が一番わかっているのだから?。」

「そうかも知れないわね。でも、今はそんな事どうでもいいわ。あなたは早くアレを捕獲してきて。」

「言われなくともそうするぞ。」

部屋の外で暴れる風が、こころなしか強くなったよ
うな、そんな気がした。

??? (後書き)

誰ですかね、この男の人。私がつりあえずこの人で連想するのは、
クラスにひとりはずいいる、「私」リッチ&天才」的なひとたち。

ああ愛しの君。プレゼントはカッターナイフ？それとも釘を一本サ
ービスで刺した藁人形？

．．．え？包丁がいいって？ダメですよ、うちのは刃が研げてなく
て林檎の皮でさえむきにくいんですから。

雪原の獣神（前書き）

眠いです

雪原の獣神

一步前も見えないような激しい吹雪の中、“59”は雪原をさまよっていた。

いくら雪や氷に耐性があっても、強い風や膝の高さまである雪をかき分けるには体力が削られる。

それだけではない。彼女は少なくとも一年はずっとまともに歩いたことすら無かった。

それなのにここまで歩くことが出来たのは奇跡としか言いようがない。

しかし、その「奇跡」もそろそろ限界のようだった。

少女の足はよろめき、これ以上歩くことは不可能のように見えた。

(でも・・・立ち止まっちゃ、ダメだ・・・)

捕まりたくない。あんなトコロに戻るくらいなら、飢え死にしたほうがずっと良いに決まっている。

この吹雪が、私を隠しているうちに、はやく・・・

そう心の中で呟いて風に逆らって一步踏み出した時だった。

彼女の足はよろめいた拍子に虚空を踏んで、体のバランスを一気に崩してしまった。

それを見た強い風が嘲りながら弱々しい少女の体を空中に放り出す。

悲鳴もあげずに落ちてゆく少女の体は岩壁に打ち付けられ、勢い良く地面に叩きつけられる。同時に足から嫌な音が響きわたり、少女の体を激痛が走り抜けた。

「・・・っ！」

涙で曇った目で体中を確認すると、病的な白さだったふくらはぎが妙な形に膨れ上がり、赤く腫れあがっていた。他にも、数多くの傷が見られる。

(擦り傷数ヶ所、打ち身三ヶ所。それとこれは・・・骨折かな。)と、重症の怪我人はかなり冷静に自らの状況を確認した。このよ

うなことは“59”にとつては日常茶飯事だったから、慌てふため理由も無かつたのである。彼女の脳裏に、あの場所が描かれる。
モット“59”やその仲間^{モット}はみな過去の記憶のない子供たちで、「実験^{モル}対象」として何処からか集められ、何人かごとに岩屋にまとめられていた。

沢山の「実験」とやらを受けさせられた後には、みな体中傷だらけで、それでも周りの人間はただその怪我の状況をデータにとるだけ。それが元で死者が出ても決して治そうとはしなかった。

みな性格も穏やかで、仲間を大切にしようと思っていた子供たちは、出来るだけ自分たちで怪我をした仲間の治療をした。治療と言つても食事を分け与えたり清潔な場所を譲る位しかできなかったけれど。

それだけのことで大抵の子供は死なずに済んだが、子供たちは怪我が早く治ることを良しとしなかった。傷の治りが早い子供ほど実験に使われることが多くなり、二度と仲間のもとに戻ってくる事がなくなる可能性が高まるという真実に気付かされたからだった。

それでも、皆で生きてここを出よう、絶対に記憶を取り戻そうと誓っていたから皆生きること^に必死になっていた。それでも...

それでも、“59”の仲間たちは、誰一人逃げ出すことができなかったけれど。

(...やだ、私^のつたら。こんな時に考え事なんてして。)
私は、皆の最期^{この時}の時にした約束...絶対に逃げ出して、皆の故郷を、閉ざされた雪原以外の美しい世界を見る^{って}言う約束を守らないといけない。

たとえ私以外がもう戻って来ないものになつてしまつていても、皆との約束、皆の唯一の願いを。

「...みんな、との約束、を...」

“59”は両手をつき、棒切れのようになった足を引きずりながら雪をかき分けて進み始めた。彼女が片手をひとつ進める度に白い雪を鮮やかな赤が染めて行き、額からは汗が滲み出ていたが、“59”は止まらなかつた。

彼女のこめかみに、大きな石が投げつけられるまでは。

彼女のこめかみに投げつけられたのはこぶし大の黒っぽい石で、頭に当てるだけで動物の意識を奪うことができるような十分な大きさのものだつた。

「・・・痛つ・・・!?!」

朦朧とする頭を押さえながら振り返つた“59”が見たものはいくつかのこぶのように見えるもので、こちらに向かつているようだつた。

瞳孔の細い、氷色の独特の目を凝らしてみると、異様な姿が目に見え飛び込んできた。

分厚い革袋を潰したような不細工な容姿に小柄な姿。

「小鬼ゴブリン・・・!?!」

確か、私たちの世話役の一人が飼っていていつも鎖に繋がれていた。たしかとても凶暴で、集団で獲物を襲うと聞いたことがある。そう、例えば人間のような。

「にげない、と・・・!」

彼女が弱々しく呟いて足を引きずつたところでゴブリンには何も困つたことは無かつた。

手負いの獲物が逃げようとしたところで何にもならないことは彼らにもわかつていたから、その行為は

かえって彼らを楽しませる結果になっていた。

結果、一分たったかどうかと言う短い時間で“59”は岩壁の方へと追いやられ、逃げ道をなくしてしまった。ゴブリンの方に見ても、季節外れのこの時期の獲物を逃がすまいと必死だったのでスキはなかったのである。

何回か石を投げつけてゴブリンを牽制していた“59”は、3つめの石を投げようとしたところでその腕を止めた。

もう、いいんじゃないかな。私。私は、もう十分やったのではないかな。

心にふつと流れ込んできたその声は紛れも無く自分のもので、その言葉は意識が朦朧としている

“59”には甘い蜜のように感じた。

(そうだよ、もう十分やったよね。)

そうだよ。だから...

“59”がその声に答えようとした時だった。

突然視界が真っ白になって暖かいモノが“59”を包んで現実に引き戻した。

《小鬼ども。今すぐ私の視界から消え失せろ。逃げない奴は、私が腸を喰いちぎってくれる。》

雪原に力強く響きわたったその声は耳から入るものではなく、直接頭に響くような、そんな声だった。

そしてその声は“59”の目の前に飛び出してきた白いモノ...大きな獣から聞こえてきていた。

気絶しかけていることも手伝っていまいち状況を理解出来ない“59”とは反対に、ゴブリンたちはその不思議な声の主と、その言葉の意味を正確に理解したようだった。

そして、彼らは悔しそうに一斉にひいて行った。

それを見届けてから“59”の方を振り向いた獣は全身真っ白で、耳が若草色、氷蒼の鋭い瞳と太い牙を持った大きな肉食獣だった。

“59”を無表情に見つめ、何を考えているかは全く読めなかった。

（なんだろう、この獣・・・？）

私を食べるつもりだろうか。もう、どうでもいいけれど。もう、どうでも・・・

そこで、“59”の意

識は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482y/>

雪うさぎは氷空を駆け巡り

2011年11月24日18時54分発行